

足るを知る生活

足るを知る生活、知足の道という様な事は東洋人のよくいう言葉で、田舎の宿屋の欄間などに額にしてかけてあります。孔子の第一弟子の顔回は一箪の食一瓢の飲を以て樂しみその中にありとしました。一汁一菜只一つの托鉢の「」の碗あれば草を褥にして天蓋を屋根とし、雲月を友として禅僧は瓢々と行衛を定めぬ巡礼の旅を歩いたのであります。「焚く程は風が持ち来る落葉かな」と一茶は言つたそうであるが、私も東洋人であり日本人であるから心を打たれるものであります。中学生の時漢文で「富貴も淫すると能わず、卑賤も移す事能わざる處の者は大丈夫である」と学んだ事があります。裸で生れて来たのだから裸で帰るのだ。人間が寝るのには畳一畳以上はいらぬ、人間を入れる棺桶は幅一尺長さ六尺で足りる、という様な考えは仏教の中にも所謂悟を開いたという人々にハッキリしているのだという人もあるであります。

ヨブ記一章二十一節には有名な言葉が書いてある。「ヨブいう我裸にて母の胎を出でたり又裸にて彼処に帰らん、エホバ与えエホバ取り給うエホバの聖名は讃むべきかな。」

伝道の書五章十五節にも「人は母の胎より出で来たりし如くまた裸体にて帰り行くべし、その劳苦によりて得たる物を一つも手にとりて携え行くことを得ざるなり」、旧約時代からのヘブライの宗教にも斯く記されてあるのであつてあらゆる宗教に多少ともかかる傾向のあることを知る訳であります。

然しテモテ前書六章六節から八節の「されど足る事を知りて敬虔を守る者は大いなる利益を得るなり、我らは何をも携えて世に来らず、また何をも携えて世を去ること能わざればなり、ただ衣食あれば足れりとせん」とパウロの申した言葉は多少違つてゐるのであります。どうせ死ぬのだからどうでもよろしい、悟つてみれば慾も得も金も物も一切が空なるかな、色即是空といふのではない。また五節に「また心腐りて真理を離れ敬虔を利益の道と思う者の争論起るなり」パウロは觀念論やその遊戯に陶酔してゐるのではなく、信仰生活の事実について教えているのであります。テモテ書にあつては敬虔といつて言葉を信仰といつて言葉と同意義に用いて居つて、この点で、テモテ書はパウロの書翰でないと云う学者さえある程であります。信仰を営利に使用して人から信用を得、何でも経済的でケチンボで禁欲的で、信仰を利用して利益即ち金を貯めて安全な生活を樂しくしてゐる者があつて皆からやかましくいわれてゐるといふのであります。心腐つて真理から離れなければ出来ないことなのであります。そこで、「されど」と云つて自分の考え方と経験とを述べたのであります。即ち足るを知つて信仰の生活を守る者は眞実の利益があるのであります。その利益とは何であるか、九節十節の如く「されど富まと欲する者は誘惑と罠また人を滅亡と沈淪(ちふりん)とに溺らす愚にして害ある名様の慾に陥るなり。それ金を愛するは諸般の悪しき事の根なり、ある人々これを慕いて信仰より迷い、わがままの痛をもて自ら口を刺し通せり」というが如き事に

ならないというのであります。キリスト者でキリスト教信仰の故に少し信用が出来て成功すると、つい愚かにも富むことに慢心し金を愛する者が出て信仰生活から落ち、目のあてられない様な生活になつていった人を私は沢山に知っています。クリスチャンが金持になつたり教団や教会に金や財産が出来るとどんなでもない悪魔の手に渡されて行くのであります。

足るを知る生活と云つのは自分の分別と云う様な人間中心のものではないのであって神の恵によつて与えられた生活なのであります。ピコピ書第四章十一節から十三節に。ハウロが「われ窮乏によつて之をこうに非ず、我は如何なる状に居るとも足ることを学びたればなり。我は卑賤にある道を知り、富にある道を知る。また飽くことにも、飢つることにも、富むことにも、えしき事にも、一切の秘訣を得たり」と強調して居り、十三節には「我を強くし給つ者によりて凡てのこと為し得るなり」と云ふことが、足るを知るところの事の結論なのであります。

キリスト者が如何なる境遇にも耐え、これを克服し、超然として感謝を以つて喜び溢れる生活の出来るのは、思想や、觀念や、やせ我慢や、迷信ではなく、又自分の意志の力や、生活力ではなくて、『えられし恵による働き』であり、我を強くなし給う即ち生ける主イエス・キリストの恵によつて為し得るに至るのである。ところが大切な事なのです。儒教や仏教の如き、死せる宗教、教えの道、という様なものにはないのであって、キリスト教が生命の宗教であるということの所以でもあります。

キリストに在る者はその所有している物や力量に影響されないのであります。敢えて哲人ディオゲネス（B.C.三二二年）の如く乞食になる必要もないし、アレキサンダー大王になる必要もないのであって、どんな境遇に在

つても同じ気持ちと如何なる場合、たとえ戦場であつても平常心を失わないで生活出来るものでなければなりません。落田になつて貧乏になつたから恥ずかしくて教会に来られないとか、金が出来、地位が出来て教会に来る暇もない、などとこつものはクリスチヤンではないのです。我らはイエス・キリストと共にあるものならば、それで一切が足りるのであって、その他の事で左右される筈がないのです。「我はわが主キリスト・イエスを知ることの優れたるために、凡ての物を損なりと思い、彼の為に、既に凡ての物を損せしがこれを塵芥(ちりあくた)の如く思つ」(ピリピ書二章八節)というパウロの告白の如く足るを知るの秘訣は主キリスト・イエスを知ることによつて、心も胸も、生活も、一杯に充たされて、衣食住のことが、余り問題にならないのです。「汝らの知らぬ食物あり」とある如く、子供が面白い所に連れて行つて貰える喜びで何も彼も忘れてしまふ様なものです。又赤児が母の懷に安んじて眠つている様なものであります。

足るを知るの生活は即ちイエス・キリストを知り、彼と共に在る生活であつて、それが信仰生活であり、祈りの生活であります。それは「彼と常に語り、交る生活」であります。私たちは足るを知る生活を与えられんとするならば、先ず主イエス・キリストを一層知るために、聖書に親しみ、彼に交ることを許されている祈りの生活を励まねばならないと思います。

(一九五一年七月四日、札幌北一条教会にて)